

# オーギュスト・コントの社会再組織論

千 石 好 郎

## 第1節 経歴と業績

### (a) コントの人生における興味ある事項

① コントは、敬虔なカソリック教徒の両親の家に生まれた。それは、コントが Isidore Auguste Marie François-Xavier Comte という長い名前を、キリスト教の聖人名にちなんでつけられたことに示されている<sup>1)</sup>

Isidore=スペインのセビリヤの聖人 (560 頃-636)

Auguste=ローマの「神聖アウグストゥス」(BC27-AD14)

François-Xavier=天文 18 年、布教のために日本へ来たこともある、  
スペインの b 聖フランシスコ・ザビエル (1506-1552)

その上、Marie は、いうまでもなくキリストの聖母マリアである。

② にもかかわらず、コントは、1812 年 14 歳でリセ (1802 年に発足した) に入学し、時代精神である共和派のイデオロギーを信奉するようになった。1814 年 10 月、理工科学学校 (École Polytechnique : 1794 年創設) へ入学した。当時ナポレオンの軍隊がモスクワで敗退し、王政復古となっていたが、コントの入学時、学校は万事軍隊方式となっており、コントは「事毎に反抗する態度」であったので、学校側と対立、1816 年に退学処分となる。

③ 一時、帰郷したが、パリへ舞い戻り、1817 年 5 月頃、サン・シモンの秘書となる。以後、サン・シモンから多くを学びながら、共和主義的イデオロギーから離脱していく。そしてサン・シモンの『産業』『組織者』『産業体制』『産業教理問答』の著作に協力する。1822 年、師と対立、1824 年 4 月に訣別する。

以後、母校の数学の復習教師をアルバイトとしながら、自ら塾を開き著述活動を展開する。

- ④ コントの生涯の理論活動は、以下の三つの時期に分けられる。すなわち、
- 初期（1820-29） 『小論集』
  - 中期（1830-42） 『実証哲学講義』
  - 後期（1843-53） 『実証政治体系』

以下、この時期区分にしたがって、彼の理論活動の展開を見ていく。

ただ、コントの人生のエピソードとして、清水幾太郎が「コントの生涯が前期と後期との二つに分けられることは、コント自身も述べていることであり、多くの研究者の認めるところである。前者は、『実証哲学講義』全4巻によって、後者は、『実証政治体系』全4巻によって代表される。前者には、終始、カロリヌの影が差し、それが完成すると同時に、彼女はコントから去って行った。後者は、クロチルド・ド・ヴォー夫人への愛情及び崇敬によって生まれ、彼女の影響の下に書かれた、二つの大著は、それぞれ、二人の女性と結びついている<sup>2)</sup>と述べていることを、紹介しておこう。

## 第2節 初期の理論：「社会を再組織するために必要な科学的事業のプラン」

### (a) 初期のコントの理論

『小論集』には、以下の6つの論文が含まれる。これらを、コントは、後期の『実証政治体系』の第1巻の「序文」に、「偉大なる生涯とは何か。若き日の思想の壮年に至って実現されたるを言う」（アルフレッド・ヴィニー）という言葉をもットーとして掲げ、第4巻の末尾に付録として再録した。このようにコントの生涯の理論活動は、初期に萌芽的に登場した着想を、中期と後期に深化・拡張するものであった。『小論集』は、最近では、ジョーンズ（Jones）によって、“Early Political Writings”（Cambridge Univ. Press, 1998）として英訳されている<sup>3)</sup>。6つの論文とは、以下のものである。

- ① 意見と願望の一般的分離 (1819)
- ② 近代史の一般的性格の要約的評価 (1820)
- ③ 社会再組織に必要な科学事業のプラン (1822)
- ④ 諸科学と諸科学者に関する哲学的考察 (1825)
- ⑤ 精神的権力に関する考察 (1826)
- ⑥ 興奮に関するブルッサーの論文の検討 (1828)

#### (b) 「社会を再組織するために必要な科学的事業のプラン」

このなかの中心的論文が、「社会を再組織するために必要な科学的事業のプラン」である。「プラン」の「序論」では、「一つの社会組織が消滅し、もう一つの新しい組織が完全な成熟期に達して、形成されようとしている」として、「組織破壊の動き」と「組織再建の動き」という「性質の違った二つの動きが今日の社会を動揺させている」という状況認識を示している。「先進諸国民が体験している大きな危険」は、この二つの正反対の動きが共存していることによるもので、「この動揺する状況に終止符を打ち、日一日と社会を侵している無政府状態を食い止める唯一の方法」として、「文明諸国民に、批判的方向に代えて建設的方向をとらせ、新しい社会組織の形成にすべての努力を向けること」<sup>4)</sup>であるとする。そして、国王と人民の双方の対応を総括し、代案を提出する。すなわち、

国王の侵した誤り→国王にとっての社会を再組織→封建的・神学的組織の無条件の再興。

人民の誤り→封建的・神学的組織を破壊するのに役立った批判的原理を、そのまま組織の原理として提出すること→無政府主義を帰結

そして、コント自身が、「尽きない革命の泉であるこの嘆かわしい悪循環からついに抜け出す方法」は、「国王には時代逆行的方向を捨てさせ、人民には批判的方向を捨てさせることができるただ一つの理論たる建設的理論を作り上げ、国王も人民もともにこれを採用することである」<sup>5)</sup>とする。

そして、コントは、現状のよって来たる原因を「精神の段階」と「社会（世俗）の段階」に分けて考察し、歴史的な総括を遂行する。以上を集約すると、いわゆるコントの「三段階の法則」になる。すなわち、

#### 図 コントの「三段階の法則」

〈精神の段階〉	〈社会（世俗）の段階〉
神学的（虚構の）段階	軍事的時代（軍人）
形而上学的（抽象の）段階	法律的時代（法律家）
実証的（科学の）段階	産業的時代（科学者と産業家）

このコントの「三段階の法則」が、すでにコントの師サン・シモンによってなされていたことは、想起されるべきである。この論文は、もともと1817年の夏以来、サン・シモンと共同で作業していたコントが1822年5月に書かれたもので、その2年後、サン・シモンの『産業者の教理問答』の第3分冊に収録されたのだが、その際にサン・シモンが序文を書き、そのなかで「わが弟子コントに与えられた課題は、われわれの体系の総則を説明することであった。しかし、出来上がったこの著作は、……われわれの目的を十分にはたしていない」として、①「われわれの体系にあっては産業的能力と科学的能力とは等しく重要なものとみなされるべきものであるのに、彼は科学的能力を産業的能力の上におき、これを第1位とした」、②「彼は、われわれの体系の科学的部分しか論じないで、他の重要な部分である感情的・宗教的部分をなんら説明していない」と、批判した<sup>6)</sup>。

このように、サン・シモンが①すでに産業革命を優先させ、産業家主導の社会体制を構築する社会運動に乗り出していたこと、②社会の秩序再構築には、知性唯一主義ではなくて、人間の情緒面にも配慮して、新しい宗教の必要性を痛感して、新キリスト教を提唱していたのに対して、コントは、先ずは、新しい科学（＝社会学）の構築を優先させるという発想を抱いており、両者の見解の差異の故に、サン・シモンとコントとは、決定的に訣別することになったの

であった。

### 第3節 中期の理論：『実証哲学講義』

コントの理論活動が中期（1830-42）に入った時期は、パリの人口の急増期に当たっている。1800年頃のパリには、約50万人の人口があったが、それは1850年頃には100万人を突破していった。その背景には、当時のパリの土木工事が労働力の需要を喚起し、増加した人々の新たな衣食住への需要が作り出され、それに対応するさまざまな職業が増加していた。さらには、1825年以降、産業革命を終えたイギリスから機械類がフランスに輸入され、フランスでも産業化が開始され、七月王政期（1830-48）に促進されたが、産業「革命」というほどの劇的なものではなく、緩慢な形態で進行していくことになる。コントは、このような事態の展開によって「さまざまな顕著な根本的空隙の増発する危険性」に対処するために、『実証哲学講義』（Cours de philosophie positive）で、「プラン」で素描した社会再組織論を本格的に展開・敷衍したのであった。以下、その内容を主要な論点に分けて論じることにしよう。

#### (a) 科学のヒエラルヒー（上下関係）と社会学

「プラン」でも、新たな科学の構築が何よりも優先されていたが、『講義』では更に深化・展開させる。すなわち、第2講「講義のプランの提示、ないし実証的諸科学の上下関係の一般的考察」において、科学は、研究対象が単純なものから複雑なものへ（「単純さの程度」）と一般的なものから特殊的なものへと（「一般性の程度」）という順序で、歴史的に発展してきたと論じる。数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会物理学が、それである。このうち前三者は、無機物を対象としており、後三者は、有機体を対象とする。部分の集積として構成されて全体となっている無機物では、部分の研究が先行し、部分が全体の構成要素である有機体の研究では、まず全体の把握が優先する。

コントは、第四巻で社会物理学を「社会学（Sociologie）」という名称に変更

する。「科学の上下関係」の発想では、後発の科学は先発の科学に依存している。社会学の場合の先輩の科学は、生物学である。そこで、両者の規定関係を簡単に表示しておこう。

生物学

社会学

解剖学

社会静学

生理学

社会動学

## (b) 社会有機体論

社会静学は、『実証哲学講義』では、第4巻第50講「社会静学、すなわち人間社会の自然的秩序に関する一般理論の予備的考察」で論じている。その骨子を見ると、社会を一つの有機体として把握し、個人—家族—社会の三重層で考察しているのである。その場合、「人間性の主要な一般的諸特性は、人間社会にその根本的性格を付与するうえで必ず影響を及ぼす」ということを前提として、人間性の理解のために、大脳生理学の知見を活用する。すなわち、①「知的能力に対する情緒的能力の絶対的優越」<sup>7)</sup>、②「人間の精神有機体全体のなかでは、最も低い本能、最も具体的に利己的な本能が、社会性に直接関連する高級な諸傾向に対して絶対的優位に立っている」<sup>8)</sup>、③人間性には、「保守の精神と向上の精神との間にある根本的闘争」があり、「保守の精神は、必然的に、主として純粹の個人的本能から生まれ、向上の精神は、知的活動と各種の社会的本能との自然の結合から生じる」<sup>9)</sup>とする。

次に、「家族」を「個人の観念と、人類あるいは社会の観念との間で不可欠の媒介となる」ものであるという視点から、把握する。すなわち、「すべてのシステムは、自己と本質的に同質の要素から必然的に構成されなければならない。それゆえ、人間社会が実際に個人から成っているというように考えることは、科学的精神の許さないところである。真の社会的要素となるものが、最小

限その主要な基礎である一組の夫婦に還元された家族だけであることは確かである」<sup>10)</sup>。このような主張には、社会の基礎単位が個人であるとする共和派の「形而上学的」精神に対する批判があり、家族こそ社会の基礎単位であるというコントの政治的立場が、明確にうかがえる。

コントは、「家族を最も基本的な科学的側面から考察する」が、「家族生活」は、「あらゆる社会において必然的關係の基本点」であるとして、これを「合理的に検討する」<sup>11)</sup>。コントによれば、「社会生活の恒常的な基礎」としての家族には、①両性の上下関係と、②年齢の上下関係という二つの関係が見いだされ、「前者は家族を作り、後者は家族を維持する」<sup>12)</sup>。

#### (c) コントの反フェミニズム論

家族を作る「両性の上下関係」については、「健全な生物学的哲学は、ことにガルの重要な理論以後、いわゆる両性の平等についての空想的な革命的言辭を科学的に放逐し始めている」として、「人間の脳の持つ最も高級な属性に照らして考えるべき」であるとする。そして、「女性が共感や社会性の自然の発達が大であるという点で一般に男性より優れていると同時に、知性や理性という点では男性に劣っていることも、事実、疑いのないところである」として、「人間の家族の自然な運営においては、両性がそれぞれ独占的に果たすべき特別な永続的機能が存在する。そのために、両性は自然に、全く異なった方法によって共通の目的のために協力することになる」と、「社会学は、この不可欠な科学的考察を自分なりの仕方で補足する」<sup>13)</sup>。

このように、共和派の男女平等論は、現代では第二波フェミニズムとしてさらに強化されており、一定の成果を収めているのであるが、フェミニズム対反フェミニズムの闘争は持続しており、当時コントはフェミニズムに対抗するそれなりの理論を、提供していたのである。

#### (d) 分業論

コントが個人―家族―社会の三重層で実体論的に社会有機体論を構想していたことはすでに述べたが、やや視角を変えて分業論の視座から関係論的に把握する。以下、社会静学における分業論について、コントが述べていることを抜粋してみよう。

① 現代社会には、「それぞれ全く別の、ある程度は独立の生活を持った無数の個人が、才能や、特に性格の多少の差異を越えて、常に、多数の手段によって同一の一般的発達にいつも自然に協力する態勢にあるのに、しかも大多数の人々は普通は共謀ではなく、自分の個人的衝動に従っているだけだと信じながら知らず知らず協力している」という「規則正しい不断の一致協力」<sup>14)</sup>が、存在する。

② 「人間の作業の分割の必然性と、これに対応する個々の職業の専門化という古くからの社会的準則」「この原理を次第に完全に実現することが、現在まであらゆる人類発展の不可欠の条件であった」<sup>15)</sup>

③ 「社会的連帯をもつばら構成し、社会有機体の拡大と複雑化の基本的要因となっているのは、各種作業の継続的分割なのである」<sup>16)</sup>

④ 「私たちの一人ひとりとは、毎日、現代の分業の必然的結果として、多くの点で自己の生命の維持すらも、ほとんど無名の数多くの行為者の能力や道徳性に自然に依存している」<sup>17)</sup>

このようにコントは、分業を、社会進歩の必然的要素として位置づけている。しかしながら、コントは、分業の発展には、さまざまなマイナス面があることを指摘する。

⑤ 「一方において、社会的機能の分割により、部分の精神は他の仕方ではあり得ないほど十分に発達するが、他方、それは自分に全体の精神を沈黙させるか、少なくとも大いに圧迫することになる。同じように道徳的見地からすると、分業によって各個人は大衆に対する緊密な依存関係に立つと同時に、自己の専門的活動自体の発展によって自然に大衆から離反する」<sup>18)</sup>



⑥「一方で、社会的感情は同一職業の個人の間ますます集中し、十分に似通った習慣や思惟のない他の全階級に対しては無縁になる。このように、社会全体の発展、拡大を可能にした同じ原理が、別の面では、ほとんど、あるいは全く、同じ人類には属していないように見えるほどばらばらの同業組合群に社会を解体しようとするのである。人間の能力が次第に発達した第一の根本原因である分業は、ある一つの面では非常に有能だが、他のすべての面で救いようもない無能な人々を作り出す宿命にあるように思われる」<sup>19)</sup>

⑦「分業が知的および道德的不平等の根本的発達を強く促す」<sup>20)</sup>

後年、このテーマを『社会分業論』(1893)で本格的に論じたデュルケームは、「分業は社会的連帯の唯一の根源とはいえないまでも少なくとも主要な根源であるということ」、以上のことを仮定することは正当である。すでにコントはこの見地に立っていた」と、コントの営為を称揚している<sup>21)</sup>。

#### (e) ヘーゲル『法の哲学』(1824)との部分的共通性と並行性

コントは、分業とその逆機能について論じたのだが、その克服策についても、考えていた。それが、コントの政府論である。すなわち、

①「政府の社会的使命は、主として人類発展の原理そのものに不可避免的に結果である観念、感情、利害の根本的分散傾向という宿命を十分に抑え、できる限り防止することにある」<sup>22)</sup>

②「政府の広い不断の介入がなければ、異常な専門分化の結果、人間の能力は次第に行き詰まり、やがて社会の進歩も不可能になってしまうであろう。このような作用の性質自体、それが単に物質的なものであってはならず、同時に、そして知的、道德的なものであるべきことを十分示している。これはすでに、いわゆる世俗的政府と精神的政府という二つのはっきりと違った政府の必要性を示している。この二つの政府の上下関係こそ、今日では過小評価されているが、カソリック教支配の好結果として、今日まで全社会組織体系の中で実現された最高の改良なのである」<sup>23)</sup>

③「この調整機能は、人類の発達が進行するにつれて不必要になっていくところか、調整の原理が発展の原理と不可分である以上、この機能が正しくとらえられ、発揮されていく限り、逆に、ますます不可欠のものになっているはずである」<sup>24)</sup>

このようなコントの政府論は、一昔前に隣国ドイツで、ヘーゲルが『法の哲学』で、人倫の弁証法的展開を論じて、家族（人倫の即自的肯定態）→市民社会（対自的否定態）→国家（即自かつ対自的止揚態）と論じたものを、実証主義的に論じたものであると考えられる。

#### (f) マルクスのコント批判に対する論評

コントとヘーゲルがまさに理論面における並行性があったとすれば、ヘーゲルを唯物論的に転倒したとされるマルクスとは、どのように対比することができるだろうか？

マルクスは、1866年7月7日、盟友エンゲルスに次のような手紙を書き送った。

「僕はいまついでにコントを研究している。というのは、イギリス人たちやフランス人たちがこいつについて大騒ぎしているからだ。彼らをそれにひきつけるものは、百科全書的なもの、総合的なものだ。だが、ヘーゲルに比べれば惨めなものだ（コントは専門の数学者および物理学者としてはヘーゲルよりすぐれている、つまり細部ではすぐれているとはいえ、ヘーゲルはこの分野においてさえ全体としては無限に彼よりも偉大なのだ）。しかもこのくだらぬ実証主義は1832年に刊行されたのだ！」<sup>25)</sup>

たしかに、弁証法的レトリックでは、コントはヘーゲルにはるかに劣っているかもしれないが、理論の実質においては、ほぼ同じことを主張していたことは、前に述べた通りである。マルクスはコント理論を「くだらぬ実証主義」と切り捨てている。しかしながら、たとえば、分業論について、コントとマルクスを比較することによって、はたしてどちらが現実であったかが判明するだろ

う。マルクスとエンゲルスは、1846年に『ドイツ・イデオロギー』の原稿を書いているが、そのなかでは、分業の廃絶論が展開されている。すなわち、  
「各人が活動の排他的な領域をもつのではなく、むしろそれぞれの任意の部門で自分を発達させることのできる共産主義社会においては、社会が全般的生産を規制し、そして、まさにそのことによって私は、今日はこれをし、明日はあれをするということができるようになり、狩人、漁師、牧人、あるいは批判家になることなしに、私がまさに好きなように、朝には狩をし、午後には批判をするということができるようになる」<sup>26)</sup>

有名ないわゆる分業廃絶論である。コントは、『実証哲学講義』第4巻第50講で、そのような理論を次のように批判している。すなわち、

「形而上学的哲学は、社会の根本的有用性すら組織的に否定して、現代の才人たちを手放しで喜ばせてしまった。……このようにして、人間の作業の分割の必然性と、これに対応する個々の職業の専門化という古くからの社会的準則を直接に打倒しようと、現代において一種の社会的形而上学が独断的に形成されたのである。これによると、作業の慎重な局限と努力の忍耐強い継続は、もはや成功の不可欠な条件とは考えられない。一度に多くの職業に従事すること、一つの職業から別の職業へと故意にできるだけ早く変わること、これが、新しい普遍的作業計画が、格別に、「魅力的」なものとして、現在、組織的に文明人に推奨している仕方なのである」<sup>27)</sup>と。

マルクス・エンゲルスは、フランスの社会主義者たちを「空想的社会主義者」と名付けたが、コントによれば彼らのほうこそ、「形而上学的哲学」者と形容されるべき存在であったのである。

また、未完に終わったマルクスの国家論は、通常、資本主義国家＝階級支配の道具説（あるいは、少数意見では「共同幻想体」説）とされる。これに対して、コントの政府論は、前項で見たとおり「世俗的政府と精神的政府」といった極めてバランスのとれた立論であったことが、確認できる。マルクス・エンゲルスよりも、コントの方が堅実であったと評価してよいのではなかろうか？

## (9) 社会動学

コントは、形而上学的思考を排除して、実証主義的社会理論の構築を目指した。すなわち、マルクーゼが述べているように、コントは、一方では、「進歩が主として知的な進歩であり、実証的な知識のたえざる前進であるという啓蒙主義の見解」を持ち続けながら、他方では、「啓蒙主義の見解から、その実質的な内容をできるだけ取り除いた」のである。すなわち、「無益な政治煽動の代わりに広大な知的な運動をおきかえ」たのである（『理性と革命：ヘーゲル社会理論の興隆』391頁）。すなわち、コントは、革命（＝与えられた状況の体制の全体的な変革）を排除して、永劫不変な「自然」法則のもとにおける社会秩序の調和的な進化を目指す。

このような見地から、コントは、「共生の諸法則」を取り扱う社会静学に対して、「継起の諸法則」をとりあつかう社会動学を構想する<sup>28)</sup>。

### 第4節 後期コントにおける人類教の創設：『実証政治体系』

1848年、またもやフランスで2月革命が勃発し、今回はヨーロッパ諸国に革命の嵐は拡大し、波及していくことになる。この年、マルクスやエンゲルスが『共産党宣言』を著し、コントとは別の方向を模索することになったことは、銘記されるべきであろう。このような時代背景のなかで、コントは、これまでの作業をさらに深めて、『実証政治体系』を著していく。

コントが生涯をかけて行った理論的作業とは、どのようなものなのであろうか？ レーモン・アロンは、人類の一体性こそ、コントの中心的観念であり、それは、三つの変種に分岐するという<sup>29)</sup>。すなわち、

- ① コントは、社会組織の形態としての産業社会の典型的特徴が、普遍的となることができていることを強調しており、これは、サン・シモンを継承するものである。
- ② 『実証哲学講義』のなかで、人類の歴史は一民族の歴史として考察されるであろうし、またされなければならない。

③ 人類の歴史が一民族の歴史であるが故に、人類のこの一体性は、人間性の変容性によって基礎づけられており、歴史が提示する諸制度の多様性にもかかわらず、認識されるであろう根本的秩序のなかに、表現されるであろう。

アロンによれば、このようなコントの思想は、コントの三つの目標と関連づけることが出来るという。すなわち、

- ① 社会改革者としての目標
- ② 諸科学の方法と成果を総合せんとする哲学者としての目標
- ③ 自分自身を新しい宗教、すなわち、人類を至高の存在として愛と崇拜の対象となる人類教の高僧として任命する人間としての目標

『実証政治体系』は、「人類教を創設するための社会学概論」という副題が付けられている。扉頁には、書名の上にゴシックで「西欧共和国」、その下に「秩序と進歩」「他人のために生きる (vivre pour autrui)」「偉大な日を生きる」という三つの標語が掲載されている。著者名の右下側に小さく「愛を原理に、秩序を基礎とし、進歩を目的とする」(L'Amour pour principe, et L'Ordre pour base ; L'Progres pour but) と三行に記され、中期の『実証哲学講義』にはなかった「愛」が全面に打ち出されている。『実証政治体系』は、まさに、「名は、政治の書物であるけれども、実は、それ以上に、道徳及び宗教の書物である」<sup>30)</sup>

#### (a) 社会静学の精緻化

コントは、社会学を、社会静学と社会動学の二部門とした。そして、社会静学は、『実証哲学講義』のなかでは僅か一章だけを占めるにすぎなかったが、『実証政治体系』では、その第2部の全部が社会静学のために割かれて、詳述されている。コントの社会静学は、人間性の研究と社会の性質の研究という二つの部分に分割されている。

コントの人間性の理論は、「大脳表」に基づいて構築されており、人間性は、感情、意志、知性の三つの側面をもつものとされる。では、これらの要素の間の関係は、どのように理解されるのであろうか？ コントの解答は、人間は、

行動のためにつくられた（行動的被造物）。だが、行動するためにつくられたが故に、彼は決して知性によって行動するのではない（ここには、形而上学的思考に対する批判が背後にある）。すなわち、人間は感情によって行動し、行動するために思考する<sup>31)</sup>

## (b) 諸科学の統合の前進と倫理学の設定

では、諸科学の統合は、『実証政治体系』では、どのような展開をみせたのであろうか？ 科学のヒエラルヒー（上下関係）については、『実証哲学講義』で、数学－天文学－物理学－化学－生物学－社会学が論じられていた。ところが『実証政治体系』の第2巻（1852年）では、次のように述べられている。すなわち、

「先行した巻の科学的説明の後に、真の生物学は、人間の個人的認識を目的とは全くしないで、ただ、特に生活を享受する存在の総体に注目した、生活の一般的研究を目的とする。それは、まず社会秩序の理論のために、直接に生命の秩序に従い、そして最後に、人間の真の鑑賞についていえば、すべての本質的属性が、それゆえ知られた、必要な準備を構成する。実証的教義の正常な結論は、今日、身体しか研究しない医者、精神を研究していると信じている哲学者、心を特に研究している聖職者という、三つの思想家階級の間で非合理的に解体されているのが発見される。／しかし、私の卓越した先行者であるガルは、Cabanis と Leroy によって準備された、人間の真の研究 (*la véritable étude de l'homme*) を、魂の実証的認識と身体のそれとを決定的に結びつけながら、体系化することになる道を開拓した。医者も司祭も、あの科学革命の門戸を十分には理解しなかった。彼らは、私の社会学の基礎づけが、倫理 (*morale*) という神聖な名称を保持している、真の人間学 (*la véritable anthropologie*) の体系的到来を要求する百科全書の準備を終わらせたことを、以前には、少しも感知していなかった」<sup>32)</sup>

これが、「偉大な抽象的なヒエラルヒーの第7の段階」としての「倫理学」(*la*

morale) である。これは、社会学を越える最高の科学であり、感情を基礎とする主観的な科学である。

#### (c) 「客観的方法」から「主観的方法」へ

『講義』と『体系』とでは、コントの理論に大きな変化が生じているように見える。これをどう解釈するか、さまざまな見解があるが、ここでは清水幾太郎の見解を紹介しておこう<sup>33)</sup>

「客観的方法による人間や社会の研究では、研究者は、観察という行為の知的な主体である。同時に、観察される対象は、精神の産物としての諸科学という知的な客体である」。しかし、「この知的な客体が、人間の全体からの抽象されたものである」とすれば、「それは、脳の前部に座を占める知性に発するもので、中部に政治の根が、後部に道德の根があったのではないか。後の2者は、前者に比べて、根源的で強力だったのではないか」。しかし、「人間の全体を研究の客体に定めようとする瞬間、主体も単に知的な観察者でいることは出来ない」。

① 観察は、客体と観察者との間に或る距離がある限りにおいて成り立つ。

その距離が次第に小さくなり、ゼロになる時、観察という客観的方法是限界に達する。

② 愛を観察することは、如何にして可能であるか。愛は、感情の前にだけ姿を現すものではないか。

こうして、「人間存在のうちの或る小さな部分だけが、観察出来るものであって、他の大きな部分は、単なる観察者ではない、全体的な人間にとってのみ見えるもの、感じられるものである」。すなわち、「全体的な人間を客体に据えようとするれば、主体も、全体的な人間にならねばならぬ」。すなわち、「全体的な人間が全体的な人間を見るための方法」、それが「主観的方法」である。

#### (d) 人類教の創設

コントは、『実証政治体系』第1巻の「第一講の一般的結論：人類教」を。次の文章で始めている。すなわち、

「く愛を原理に、秩序を基礎とし、進歩を目的とする」(L'Amour pour principe, et L'Ordre pour base ; L'Progrès pour but)。これは、長い第一講のあとで、実証主義が、感情、理性、活動の間の不変の組み合わせによって、個人的かつ社会的な、われわれの全存在を体系化する際に、創始する最終体制の基本的性格である」<sup>34)</sup>

初期のコントは、『プラン』のなかで、「精神的権力は学者の手中に帰し、世俗的権力は産業的事業の首長に属するであろう」と主張していた。いかなる社会体制であろうと、精神的権力と世俗的権力の双方が安定していることが必要なのである。フランス大革命後のフランスでは、世俗的権力が非産業者によって掌握されていたばかりでなく、精神的権力も、批判的言説をふりまくばかりの形而上学的発想の持ち主によって独占されていた。その後、たしかに産業革命が進行して産業者の台頭が見られたのであるが、しかし精神的権力に空白がみられた。コントは、中世社会の安定性がカソリックのカソリック的組織原理によって支えられていたことを認識し、フランス革命後のボナールやド・メーストルの保守的思想家たちからも学ぶことによって、たとえ旧い宗教が廃棄されとしても、新しい精神的権力がそれを補填しなければならないと考える。こうして『実証政治体系』では、次のように主張する。

「今日、二つの陣営しか存しない。一は神が雑然と指揮する逆行的でかつ混沌たる陣営であり、他は首尾一貫的に人類に身を捧げ従う有機的かつ進歩的な陣営である。われわれは現実的な存在にわれわれの配慮を集中しつつ、この存在に唯単に現在のみならず、過去とさらには未来の人間の全身全霊を帰属させるであろう。われわれは主要な幸福を普遍的愛のなかに見出して、われわれは、できる限り他人のために生き、もって科学的ドグマに従う真に唯美的な礼拝に基づいて私的生活を深く公的生活に結びつけるであろう」<sup>35)</sup>



ここで「現実的な存在」とされているのが、「人類」である。そして、「人類」は、「偉大なる存在」(Grand-Être),「至上の存在」(Être Suprême)である。こうして、それを愛し、崇拝する「人類教」が誕生する。

コントによれば、「人類には、ただ単に今われわれとともにいる人々だけではなくて、われわれの心のなかにのみ生き続けている死者もまた、含まれる」<sup>36)</sup>そればかりではなく、われわれの最も遠い目標のために未来の地平を構成している、まだ生まれていない、人々をも含んでいる。アンドルー・ワーヴィック(Andrew Wernick)は、「生者は、常に、そしてますます、死者によって支配される。それが人間的秩序の基本的法則である」というコントの文章を引用しながら、「客観的に」存在する成員と「主観的に」存在する成員の間の(すなわち、生者と死者の間の)割合は、後者に決定的に傾いてきた」と述べる。さらに「真の社会性は、現在の連帯によりも、その後に引き続く継続性にある」というコントの文章を引用して、「人間的空間がますます展開すればするほど、継続性が、主要な問題となった。歴史的参与の分有された感覚なしに、少なくともよく想起されるという道徳的刺激なしに、愛他主義は、どうして支配的になりえようか?」と、指摘している<sup>37)</sup>。

初期には、コントは、実証主義的段階を、人間知性進歩の最後の段階と見たのであるが、その後、さらに人間性についての理解を深めることによって、「真の人間の統一をつくるものは、決して理性ではなく、またたんなる行動ではない。……感情こそ、普遍性の真の原理である」<sup>38)</sup>と主張して、「愛」が「秩序」と「進歩」とを包摂する立場へ移行する<sup>39)</sup>。今や、理性や知性よりも感情の役割こそ、より大きな意義をもつものとなった。1848年2月25日、二月革命の勃発と同時に、「実証主義協会」を設立し、社会本位体制(sociocratie)を目指したのである。そして、サン・シモンが晩年に「新キリスト教」を創始したように、コントも1849年、人類教を設立し、自ら大司祭になった。また、コントは、『実証哲学講義』のなかで、「人類という偉大な概念は、最終的に、神の概念を除き去るであろう」(la grande conception de l'Humanité, qui vient éliminer

irrévocablement celle de Dieu)<sup>40)</sup>と述べている。まさに、「キリスト教抜きのカソリック体制」(Thomas Huxley による特徴づけ)の構築こそ、後期コントの目指したものであった。

## 注

- 1) 清水幾太郎『オーギュスト・コント』岩波新書, 1978: 18 頁
- 2) 同: 171-2 頁
- 3) H. S. Jones, “Early Political Writings”, Cambridge Univ. Press, 1998
- 4) 清水幾太郎編, 『コント・スペンサー (世界の名著 36)』, 中央公論社, 1970: 51 頁
- 5) 同 60 頁
- 6) 森博『現代社会論の系譜』誠信書房, 1970: 63-4 頁
- 7) 清水幾太郎編, 242 頁
- 8) 同 245 頁
- 9) 同 249 頁
- 10) 同 250 頁
- 11) 同 250 頁
- 12) 同 252 頁
- 13) 同 255-7 頁
- 14) 同 263 頁
- 15) 同 267 頁
- 16) 同 268 頁
- 17) 同 252 頁
- 18) 同 271 頁
- 19) 同 271 頁
- 20) 同 275 頁
- 21) Durkeim, Emile, “De la division du travail social (1893)”, Press Univ. de France, 1978 ; 井伊玄太郎訳『社会分業論』講談社学術文庫, 1989: 上巻, 114 頁  
 もちろん, 分業の社会統合に対する寄与についての評価は, コントとデュルケーム (およびサン・シモン) とでは, 差異が見られる。この論点を追求したアルヴィン・グルドナー (Alvin Gouldner) は, 「エミール・デュルケームと社会主義の批判」論文 (“For Sociology: Renewal & Critique in Sociology Today”, Penguin Books, 1973) において, 「コントの見解では, 近代社会における分業の増大は, その社会的凝集を脅かした。というのは, それは, 「観念, 感情, 利害の根本的分散傾向という宿命」をそれにもたらしたからである。分業の増大は, この分析では, それが秩序, すなわち, 道徳的信念の合

意, の基本的要請を危うくするが故に, 社会的安定を動揺させた。このコント的見解を論駁することが, デュルケームの『分業論』の基礎的狙いの一つであった。デュルケームは, 「通常」社会的無秩序をもたらすのは, 分業のものではないと考えて, コントの分析をきっぱりと拒否した」(p.372)として, さらに分析を進め, 検討している。

- 22) 清水幾太郎編, 同 272 頁
- 23) 同 272-3 頁
- 24) 同 273 頁
- 25) 『マルクス・エンゲルス全集』31 巻:196 頁
- 26) 服部文雄監訳『新訳・ドイツ・イデオロギー』新日本出版社, 1997:44 頁
- 27) 清水幾太郎編, 同 267 頁
- 28) Auguste Comte, “Oeuvres d’Auguste Comte” TomeⅣ, Editions Anthropos, 1968: p. 264
- 29) Raymond Aron, “Main Currents in Sociological Thought”, Penguin Books, 1968; 北川隆吉 他訳『社会学的思考の流れ・Ⅰ』法政大学出版会, 1974:134-5 頁
- 30) 清水幾太郎『オーギュスト・コント』岩波新書, 1978:189 頁
- 31) 以上は, アロンの『社会学的思考の流れ・Ⅰ』の要約(122-134 頁)をさらに要約している。
- 32) Auguste Comte, “Oeuvres d’Auguste Comte” TomeⅧ, Editions Anthropos, 1968: p. 437
- 33) 清水幾太郎『オーギュスト・コント』岩波新書, 1978:183-4 頁) 同 255-7 頁
- 34) Auguste Comte, “Oeuvres d’Auguste Comte” TomeⅦ, Editions Anthropos, 1968: p. 321
- 35) Ibid. p. 398
- 36) Auguste Comte, “Oeuvres d’Auguste Comte” TomeⅨ, Editions Anthropos, 1968: p. 66
- 37) Andrew Wernick, “Auguste Comte & the Religion of Humanity: The Post-Theistic Program of French Social Theory”, Cambridge Univ. Press, 2001: p. 113
- 38) Auguste Comte, “Oeuvres d’Auguste Comte” TomeⅦ, Editions Anthropos, 1968: pp. 12-3
- 39) 勝田吉太郎は, 「コントの実証主義哲学の秘められた神学性は, あの有名な「人類の礼拝」に至って頂点に達する。安定した堅固な社会であるためには, 神話が必要である。もしも古い宗教が廃棄されるべきならば, 新しい宗教がこれに代わらねばならない」として, 「近代の人間にとって「進歩の理論」は, 通常ありきたりのあらゆる科学的理論よりも一層重要な意味をもつ。近代の人間にとって進歩の理念の意義は, それが近代人に失われた形而上学と宗教との代用をなすことにある。いや, より正しくいえば, それは近代人にとって形而上学そのものであり, また宗教そのものでもあるということ, ここにある」と論じている(『革命とインテリゲンツィア』筑摩書房, 1966:15-18 頁)。
- 40) Auguste Comte, “Oeuvres d’Auguste Comte” TomeⅦ, Editions Anthropos, 1968: p. 329

本稿は, 平成 15 年度松山大学特別助成の成果の一部である。